

2022/8/7

(掌編小説 (定本)「老斗 (らおど)」) 書庫版



キリっとして如何にも気の強そうな顔をしているのに、意外にも子供好き。
お店にやってくる子供を見ると相好が崩れる。
何度来てもやはり相好を崩す。
見てくれ構わぬ働き者。地べたにはいつくばって念入りに雑巾掛けをする。
故国からやってきた後輩の面倒もよく見る姉御肌。
反面少し焼きもち焼き。
それはすぐ表情に出る。
子供みたいなところもある。
思ったよりお茶目でユーモラスだ。
けれど頭はなかなかいい。
学がある訳ではなさそうだが、気働きと回転が速い。
今どき我が国には居ないタイプ。
それで外見はというと、実際そんな恰好をしている訳ではないが、イメージとして
「黒いチャイナドレスに身を包んだ謎の美人人妻スパイ」
初めお互いの国の言葉を聞きあい教え合う処から始まって、
助けたり助けられたり、
庇ったり庇われたり、
手に入りにくいものを手に入れてやったり、家族にしか出さないという賄い料理を食べさせてもらったり。
行くと自分の紹興酒のボトルには一目見てわかる様に必ずゴム輪が巻かれておりラベルの上には「老人」と書かれている。
初めは何も言わなかったが、だんだんこちらの気持ちが動くにしたがって気になりだした。
そしてある日

「確かに俺はじいさんだが、何もわざわざ「老人」と書く事はないだろう。なんで「老人」と書くんだ？」

と聞いてみたが、なにやらにやにや笑うばかりで答える素振りがまるでない。

顔には「ヒッ、ミッ、ツ」と書いてあるように見える。

例のお茶目顔の上にそう書いてある。

処があるとき、本人がしばらく席を外していたので、幾分暇を持て余し、そのボトルを何気なく見ていると「老人」と書かれているとばかり思っていた文字が「老人」ではなく「老斗」と書かれていることに気づいた。

「老人じゃないのか。でも老斗ってなんの事だ？」

それで手元のスマホアプリで調べてみると「らおど=いつも斗(たたかって)いる」と出た。

戻ってきた俊麗にそのことを言うと

「アナタ、イツモ、タタカッテイル」

と恥ずかしそうに照れ笑いをした。

其れが得も言われず可愛らしかった。

「カワイイってなんていうんだ？」

「くーあい」

「じゃ、ニー、クーアイ、クーアイ。フェイチャン (=very)、クーアイ」

結局彼女とは結ばれることはありませんでした。5年前の事です。

しかし俊麗が呉れた「老斗」という言葉だけは心の中核に残っております。

お怖れながら、今思えばあの時初めて耳目した「老斗(らおど)」というたった一音一語がひとの「性分(しょうぶん)という奥底」に忍び込み、その後の自分の歩き方を密かに決定づけたような気がしないでもありません。